

伝統的に行われてきた道徳の授業のスタイルは？

道徳の授業は、4月編でお知らせしたように、①ねらいとする価値の理解、②価値に基づいた自己の振り返り、③今後の生活における自己課題の明確化が行われれば、どんな資料でもどんなスタイルの授業でも、様々なバリエーションがあってよいと考えます。実際に、本屋に行けば、道徳授業について書かれた様々な本を売っています。子供は、授業パターンのマンネリ化を最も嫌いますから、今後、自分のため、子供のために新鮮な気持ちで授業に取り組めるように工夫してほしいと思います。ただ、守破離と言われるように、何事でも基礎が大切。そこで、今回は、一番オーソドックスな道徳の授業のスタイルについてお知らせします。

導 入	扱う価値に気付かせる または 資料内容に関心を高める
------------	-----------------------------------

思いやりを取り上げるのなら、思いやりのある行動をしようと思ったけどできなかった経験を2～3人に発表させたり、本時で扱う資料内容への関心を高めたりする。(5分以内)

展開前段	資料をもとに価値について深く考えさせる
-------------	----------------------------

資料を用いることが多い。資料は、教師の範読で子供に与える。分断せず、一括で与えたほうが失敗は少ない。結論が分かっちゃってしまっちは子供が一生懸命に考えないという先生もいるが、結論が分かっていた方が子供は安心して考えることができる。

なお、発問は資料中に答えのない行間を問う発問とし、主人公の視点で統一して追及するようにする。発問数は最多でも3つまでとする。

展開後段	より高い価値観から自己を振り返らせ、自己課題を把握させる
-------------	-------------------------------------

資料の内容とは分けて考える学習とする。例えば思いやりであれば、資料場面以外の状況における思いやりのある行為としてどんなものがあるか、子供の認識を広げてやる。「今まで、勇気を出して他人に対して親切にしてよかったと感じた経験はあるか」などの質問も考えられる。なかなか自分たちからは言いにくいので、教師が日常の行動を見て、高い価値観に基づいた行為のできている子供の行いを紹介してもよい。級友ができていたことを聞けば、自分もやってみようと思うのが大多数の子供である。この活動を通して、子供は、高い価値に基づいた行為が自分としてできてきたかを振り返ることとなる。時間は、せいぜい10分程度しか取れないだろうが、ここが最も大切な段階だと考える。

終 末	自己の課題を克服するための実践への意欲を高める
------------	--------------------------------

教師の説話で締めくくる。教師の経験(成功体験でも失敗体験でもよい)を語ったり、詩の朗読をしたりしてもよい。先生も同じ人間で、日々向上に向けて努力していると感じれば、人生の先輩としての教師の生き方が子供たちもモデルとなる。役職の先生に登場してもらってよい。決して押し付けがましくなったり、お説教にしたりしない。中学校の先生は、特に注意したい。(2～3分)

資料・発問・板書・ノートで気を付けることは

★ 資料を選ぶときに気をつけること

よい資料とは、学級全体で価値について考える際の共通の土台となり、自分たちを映し出す「かがみ」に相当するものです。道徳の場合、よい資料を用いて、その指導方法を工夫することが、よりよい授業作りの条件となります。道徳の授業は、資料と発問で60%が決まるといっても過言ではありません。

- ・ねらいを達成するためにふさわしいもの
- ・子供の興味をひくもの
- ・教師が魅力的に思うもの（ただし、発達段階を考える必要はある）
- ・時間内で取り扱えるもの（今回の指導要領では2時間続きの授業もよいこととなった）
- ・多様な考え方や感じ方が引き出せるもの
- ・指導方法が工夫しやすいもの
- ・一読しただけで内容が分かるもの 等

別に、読み物資料に限定する必要はありません。一枚の絵や写真でも、ビデオ教材でもよい。ただし、ビデオを見せただけではだめで、ちゃんと道徳学習資料4月編の3つは行うこと。

なお、合唱コンクールをめざして「協力」について考えさせたいからと、合唱コンクールを扱った資料を探そうと思っても、思い通りの資料はなかなかありません。資料を選ぶときに大切なことは、資料内容の一致ではなく指導したい価値内容の一致です。「協力」に関するよい資料をもとに展開前段を学習し、展開後段で自らの生活について振り返るときに価値観で一致させればよいわけです。そうしないと、重いような資料は見つかりません。「明るい心（人生）」をもっと使ってください。子供全員の手元に準備でき、手軽に使えます。ただ、事前の教材研究もしないで巻末の指導案通りに指導してはいけません。失敗することもあります。

★ 発問について

- ・資料に関する発問は、多くて三つまで。じっくりと話し合わせたいときは可能であれば一つでも十分。（テーマ発問は正にこれ）
- ・資料中に答えのあることを発問しない。
- ・基本的には、教材中の登場人物の複数ではなく、特定な一人の視点で発問を構成する。
- ・資料の一番中心となる部分はずさない。
- ・資料によりどんな発問がよいかはまちまちであるが、共感的資料の場合は心情を、批判的資料は行動を問うとうまくいくことが多い。

●資料の活用類型から考えた発問

- ・批判的活用 主人公の行為や考えを批判させる…～したことをどう思うか
- ・感動的活用 感動を大切にしたい価値把握…一番心動かされたところはどこか
- ・共感的活用 主人公の立場になって考えさせる…～はどんな気持ちか
- ・範例的活用 主人公の行為等を模範とさせる…どんな考えでそうしたのか

★ 板書について

- ・子供の発言を全て板書する必要はない。キーワードのだけの板書でよい。
- ・意見の微妙な違いが引き立つ板書を工夫したい。（上下・左右に分ける、色で区別する等）
- ・ネームプレートを活用したい。考え方の立場別に子供に貼らせる方法もある。

★ 道徳ノート

- ・最初からすべての発問が書かれているようなノート（プリント）は止めよう。
- ・書く活動を取り入れるとしたら、子供が迷い難いと思うだろう発問に対する1回と、最後の1回のせいぜい2回にしてください。